

黎明期の奉仕会

1 奉仕会にありがとう

小野 賢二(昭和41年畜卒)

第一次韓国派遣隊参加。卒業後教職を経て茨城県猿島郡(現坂東市)で自然養鶏を営みながら、地元の生活者・行政を巻き込んだ『有用微生物による環境保全事業』と『もったいないピース エコショップ事業』に取り組む。海外からの有機農業体験希望者を受け入れ、夫婦二人三脚で『国際協力と環境保全』を実践してきた。

私は、岐阜県の親孝行の昔話で知られている養老の滝がある養老山脈の麓で、農家の次男として生まれました。祖父母に、幼い時から「賢二は次男坊で冷や飯食いだから自分で生きていくのだからな」と言われて育ちました。又、自然に自分の中に強烈に刻み付けられた事があります。それは、近所の法堂に住んでいるお乞食さんが、各家を廻って食べ物などもらい命を繋いでいました。彼が住処としている法堂の扉には「なんでも食べます。よくかんで」という木札が下がっていて、信仰心の熱い周囲の人たちに受け入れられているのを見て育ったのが、後の自分の人生に食に対する感謝の念や助け合いの精神など植え付けてくれたように感じています。

私が東京農大を選んだ理由は育ててくれた風土と食の大切さでした。鶏の研究として種鶏の繁殖技術と日本古来の種の保存を研究するための畜産学科でした。それは2年間養鶏試験場に勤務していた時に農大卒で農学博士の方に出会えたご縁からでした。なんと素晴らしいことをされている事か、特に種鶏の改良と種の固定をする遺伝学には感心する事ばかりでした。わずか1年半でしたができるだけのお手伝いをさせて頂きました。ある時先輩が私の将来を気にかけて下さり、「今後日本で養鶏に携わる仕事をするならば是非農大で学問を究めたまえ」との勧めがありました。事務系より専門職に就いたほうが人生はより豊かになり発展性が持てるのではと勧めて頂き受験することに決めました。幸い合格しましたが、私の郷里では大学に進学する人は殆どいなく、親に授業料以外は頼れなかったので、研究室に寝泊りする事もあり、アルバイトに明け暮れる日々でもありました。

昭和37年の入学で同級生よりも2年間年上でした。これが功を奏したのか入学間もない頃のある日教授に研究室に呼び出されて「繁殖学研究室に入り共に研究しようではないか」と面談を受けました。本当に驚きました。願っても無い事で1年生から研究室に通い始めました。実にユニークな人達が全国から集まりそれは楽しい毎日でした。次男の私には帰る処はありません。何処にでも青山ありと決めると自然に青雲の志をもてるような気持ちになってきました。

2年生になったある日掲示板で海外移住研主催のブラジルの農業についての調査とボランティア募集についての講演があり何か興味が湧いてきました。何事にも見聞を広めようと聴きに行き会場の教室は満員で熱気に溢れていました。

※国際ワークキャンプの案内状(1963年のもの。一部スペル不具合あり)

International Work camp

☺ Korea 1963

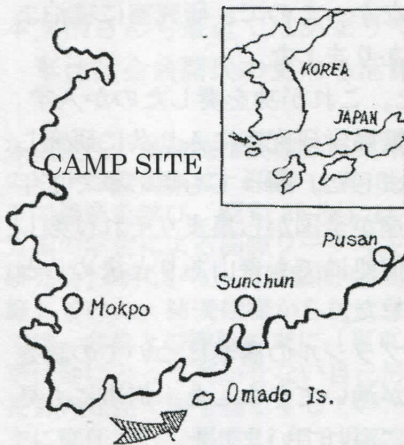
Oma Island, Cholla Namdo
July 30 - August 23

ARE YOU INTERESTED IN SUCH THINGS AS

- *Service to our less fortunate neighbors
- *Fellowship with our fellow man thru personal contact?

If you are, here is an opportunity for you.

Korea Work Camp Conference is sponsoring an international work camp during the coming summer vacation period, July 30—August 25. Camp site is Oma Island, one of many small islands off the southwestern tip of the Korean peninsula. We will help a land reclamation project for a group of cured and resettled lepers. The project, when completed, will give them about 1,100 Chongbo of reclaimed land. Our work will be simple but rugged. In the main, we will help repair a dike needed to reclaim a tide-washed land on the island. Every camper is expected to work 6 hours daily, 4 hours in the morning, 2 in the afternoon. Our work there will help our unfortunate neighbors materially. But more than that our presence there will give them renewed courage and hope. The schedule of work will be planned for a balanced program of work, fellowship and fun and will include local sightseeing excursions.



拓殖学科の杉野忠夫教授が講義をされ、移住した先輩達の様子と若者への希望と期待に就いての話でした。次に話されたのは SCI (Service Civil International : 国際市民奉仕団) のアジア局長さんが「海外のボランティアを募集しているのでアジアでの活動に加入してほしい」とのことで、終わってから早速たずねると、なんと SCI を主体とした農大のボランティアグループがあると紹介されました。これが後の奉仕会の基礎となった活動部隊でした。週末にはキャンプとして障害者施設などを訪問してあらゆる作業を皆なで引き受けました。そして1年後の1965年に AVS (編集注 Agriculture Volunteer Service : 農業奉仕団) 海外活動として第1次韓国隊が編成され参加する事にしました。

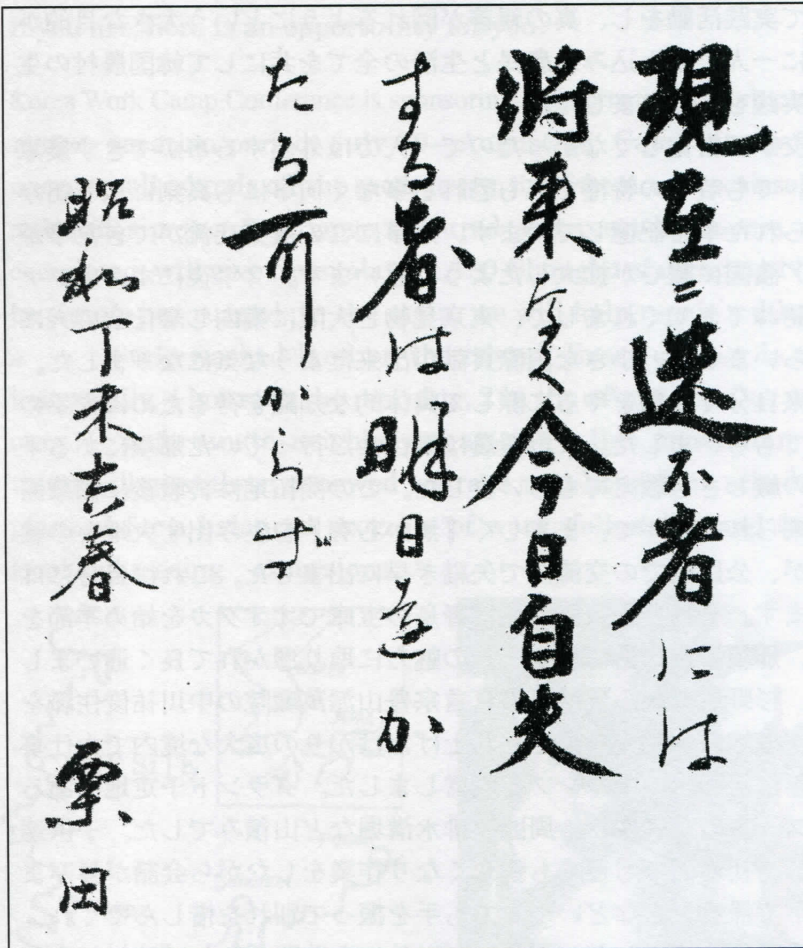
9名の隊員で7月から9月までワークキャンプが実施されましたが、この韓国隊はもう一つの役割がありました。それは日本 FAO 協会での農業研修生交流計画があり韓国と農業を通して実践活動をし、真の親善が図れるようにという大きな目的がありました。各農家に一人で住み込み、農民と生活の全てを共にして韓国農村の生活実態を理解すべき実践をしてきました。

当時は韓国との国交が正常化してなかったので一人では外出する事ができず農家の主人と同伴でした。でも若者の特権で何も恐れる事なく何事にも真剣に取り組みそれなりの成果が得られた事を記憶しています。無事にこの農業交流ができた事が韓国はもとよりアジア諸国に関心が拡大したように思います。2年後にホストファミリーが日本に私を訪ねてきてくれまして、東京見物と大阪に案内し奉仕会の人にもお手伝いをしてもらいました。小さな国際貢献が出来たような気になりました。

その後は援農と将来自分で養鶏をやるに際して具体的な知識を得るために大手の養鶏場で実習をさせてもらいました。また援農は奉仕会が行っていた那須にある千振開拓地に入り農業の厳しさを教えてもらいました。この開拓地は終戦後に満蒙開拓地から引き揚げて来られた方々で、まさしく『無から有』を生み出す大地との戦いについての苦労話が、公民館での交流会で矢継ぎ早に出ました。これは自分には大きな糧になっています。それと那須野ガ原は野鳥の宝庫でオオタカを始め季節を通して観察できます。那須の茶臼岳に登り、その魅力に取り憑かれて良く通いました。そして奉仕会は、杉野教授から茨城県の真言宗豊山派萬蔵院の中川祐俊住職を紹介されました。障害者施設の慈光学園を立ち上げたばかりの広大な境内で力仕事はいくらでもあり、年に何回かのキャンプを設営しました。グランド予定地にある大木の抜根と整地、プールの基礎作り、周囲の排水溝堀など山積みでした。子供達との協働生活にも慣れ、初対面でもとても親しくなり作業をしながら会話が弾みました。キャンプアウトで帰るときなどいつまでも手を振って別れを惜しんでくれ、次回の再会を約して帰路につきました。キャンプ以外にも時間があれば訪れて食事と交通費がいただけるので貧乏学生には素晴らしい拠り所でした。中川祐俊住職の徳のある講話にはいつも感動するばかりでした。ご住職はその後、総本山長谷寺の

管長を勤められ、「奉仕会」という名前の名付け親でもあります。

その後奉仕会は、杉野教授が亡くなられて栗田匡一教授に変わり指導を受けることになりました。杉野先生はどちらかと言いますと中南米の農業開発と技術指導が主な活動方針でした。一方の栗田先生は東南アジアが拠点となり特にネパール国を中心に国際協力に力を捧げられました。その功績によりネパール国から文化功労章の叙勲を受けられました。その先生の教えの中心哲学は『現在に迷う者には将来なく、今日自失する者は明日を語る可からず』で、この言葉が真髓であります。「誰人も皆同様に与えられている時間を大切に無駄にするな」とゆう事であると理解しました。またこれからの若者は『国際協力と環境保全』に全力で立ち向かうべしだと号令を掛けられました。今振り返りますと先生のその言葉のとおり、私の歩んで来た道は不思議とその通りの様でした。



『現在に迷う者には将来なく、
今日自失する者は明日を語る可からず』
栗田先生の中心哲学として、多くの卒業生にこの言葉が贈られた。

卒業後は農高の教壇に2年間立ちましたが、これまでの体験と思いがあまりにも食い違い退職することになりました。しかし幸運なこともありました。価値観を共

有する人生の伴侶に出会えたことです。2人で自由と独立へのロマンを持って、小さな借家から質素な結婚生活がスタートしました。借地に付随していた古い豚小屋を廃材でニワトリ小屋に改築し実験動物に使用する薬剤フリー鶏を何と4年間取り組みました。どうにか日々の生活ができるようになり長女が誕生しました。その間キャンプで訪れていた萬蔵院中川和尚さんを訪ね事情を話したところ農大の先輩である猿島町元町長・倉持義之さんの紹介を受け訪ねることになりました。初対面であるにも関わらずとても好意的に受け入れて下さり、この町に落ち着いたらどうかと勧められました。その後色々なお話をしているうちにとても安価な土地があると紹介を受け、結果としてこの町に落ち着く事になりました。この土地は3年前に竜巻が通過した中心地であり被害もあり地主さんも困っていた土地でした。そこは約600坪あり荒れ地で灌木と雑草が足の踏み場もないような状態でした。何ごとにも挑戦する強い気持ちで、購入することに落ち着きました。そこに2人で設計したささやかな家を新築し、人生初の自分の土地と家を取得したこの時の気持ちは決して忘れることはありませんでした。そして完全に独立するためには土地と家の借財をできるだけ早く返す事を目標に、2人で力を合わせ働く事を誓い合いました。妻は自分のできることで、結婚前にもやっていた中学生を対象にした塾ならぬ自由来（自由に来るという意味で）を始め、その傍ら、外の荒地を整地する事に楽しみを見出し、私が時間の許す時は彼女のやれないことをやって、2人の理想に沿った土地にしていきました。一方、私は借財返済のため、様々な自由業を体験し、数年後ようやく返済にこぎつけました。

その定住した猿島町の我が家は、筑波山が田圃の向こう正面に見える格好の地にあり、良い隣人にも恵まれ、田舎育ちで「郷に入っては郷に従え」の風土の中で育ってきたので、部落の風俗、習慣にも自然に溶け込む事ができました。3人の娘たちも自然の中で健康に育ってくれ、私も保育園や小学校のPTA会長や部落の区長をやらせてもらい、全てが奉仕会で鍛えられた精神力と人間力による体験が活かされたように感じています。

そして、次なる私の目標は自然養鶏場を自分でやる事だったので、まずは資金を自ら生み出すために飼料販売代理店の許可を取り毎日養鶏場を訪問して皆さんの意見を聞き技術的な話をしながら飼料の売り込みを行いました。先輩に教えられたように養鶏関係に携わっておられる農大卒の方が多く、なかでも孵化場とブロイラーの処理と販売の経営をされていた醸造学科卒の社長さんとの出会いがあり、話を伺っていると技術者が不足しているのですぐにでも来てくれないかとの事、飼料の販売を縮小しながらフリーで種鶏を主に技術指導のお手伝いをして農場巡りをさせてもらいました。種鶏農場は何箇所かあり一番大きな農場を中心に2万羽の種鶏をスタッフと共に管理をして平飼い養鶏の問題点を選び出して改良などを加え、皆なで改善をしていきました。

賢治の精神に共鳴 小野賢二・辛子夫妻



「私の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

「力合わせて理想郷を」

「賢治の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

「賢治の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

「賢治の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

「賢治の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

「賢治の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

「賢治の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

「賢治の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

「賢治の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

「賢治の理想郷がここを原です。辛子さんをお待ちしてお待ち。材料も木造を求め、賢二さんからは、半かけて、自分で取り上げたい山。自然環境に調える指示が来るまで、付けないで、賢治の精神を一人が形にしたい。」

21世紀 茨城の100人 48

この頃は全てにおいて大量生産、大量消費、大量廃棄の大きなうねりにより養鶏界もだんだん大型化になり一農場で10万羽から20万羽ほどの企業養鶏へと転換されていきました。こうなると何が起きるか、それは飼育環境の悪化による病原菌の侵入対策です。従ってこれを防ぐためには多くの薬品と添加物を飼料に混合して投与する事になったのです。この結果種鶏から生まれるヒヨコにも常に奇形などの傷害を持った個体が目につき、この現実を見たときには本当に驚きました。会議を積み重ねても薬品と添加物を取り除くとどうしても病原菌の検査結果が思わしくなく、至上命令により飼料設計の変更は断念せざるを得なくなりました。もちろん少羽数で自然な環境を整えれば十分改善できるのではないかと思われました。

そこでまだ資金は十分ではなく不安でしたが、少しでも早く最終目標の自然養鶏に踏み切る決心が付きました。年齢も44歳で一番充実した働き盛りであり本格的な自然養鶏農場の建設を決意しました。場所の選定にはできるだけ民家から離れていて、しかも里山に囲まれた土地という条件で不動産屋を走り回りました。車でお世話になっている自動車工場の社長から土地開発の会社を紹介してもらい、面談しながらこちらの事情を話し特に資金が無いので出来るだけ安価で広い場所を求めたいと虫の良い条件を出していました。思い付いたかのように案内してくれた土地が4反歩程の土地で半分ほどは低地で大雨では池のようになってしまうとこの事でした。現地に案内された時は荒地で驚きましたが、それまでの経験からこの土地は工夫次第で素晴らしい土地になると確信しました。その上に安価で雑木に囲まれているので気に入って購入することにしました。銀行に相談すると根抵当権設定ならば融資をすること、話を進め第一歩が始まりました。そしてこれまでの体験や観察を踏まえて自

2001年5月31日毎日新聞掲載

分が理想とする自然養鶏を形にして行きました。まず土地の整備は妻の教え子の家が土建会社であったので、依頼してダンプ 100 台分の土で現在のような状態にしてくれました。次に取り組んだのが、問題の鶏舎の建設です。独自に頭に描いていたのは、一室が 200 羽入る位のスペースで、自然の新鮮な空気と日光が入る四面解放型で、産卵箱、とまり木付きで、運動場のある鶏舎でした。それを資金の節約も兼ねて、出来るだけ廃材、廃棄する製材所の半端物を活用して、自分で作るという計画でした。それを念頭において休む事なく 1 年半かけて、ようやくかまぼこ型の 2 棟の鶏舎が出来あがりました。運動場には夏の強い陽射しを避けるためにクヌギ、ナラの雑木を植えました。そして、鶏舎を建設しながら考えた農場の名前は「自生農場」。自生には「自然の中で、自由に生きていく」という願いが込められています。

その一方で、一時期我が家に危機がありました。妻にはちょっと不安定な面があり、それが長女のアメリカ行きを契機に生き詰まってしまいました。それでも彼女は薬などに頼らずに、早朝自然の中を走ったり、片付けや整理に没頭し自力更生を図っていました。そういう彼女を救ったのは、なんと私が大学を卒業し就職で地方に下る時、古本屋の親父さんが記念に進呈してくれたケースが日焼けした古本の初版本である「宮澤賢治全集」でした。妻はその中の数行の詩を何回も読み返しておりました。結局彼女は「人間とは」「自分とは」「いかに生きるべきか」という根源的なところで悩んでいたのです。その問いに自分が真に納得する答えを宮澤賢治から見出した彼女は別人の様に元気になり、それまでの自分を整理し、賢治の人間定義に沿って生きようと再生を期して「私の宮澤賢治」という 1 冊の本にしました。

そして、その生き方を具現化するため様々な試行錯誤の末にたどり着いたのが、自然と社会両方に繋がっている道路のゴミ拾いでした。賢治のお陰で、我が家の危機は救われ、以前よりも家族の関係も良くなりました。賢治哲学についての彼女の解釈によると、全ては現象でうつろいいく存在で、仮の姿であるが、最も確かなことは、全ての人間は誰の中にも内在している魂という次元で天と繋がっていて、その声に従って交流し生きること、各々の人生は満たされていくと。又、賢治の言葉に「自我の意識は、個人から集団、社会ひいては宇宙へと次第に進化する」とあり、彼女が苦しんだのは個人から集団、社会へと移行する段階だったのだとも言っていました。そして、彼女はゴミ拾いを通して、自分の魂と向き合い、彼女独自の社会参加の道を歩んでいきました。

一方、私は自分で作った鶏舎で、これまでの体験を通して得た結論の飼育方法で養鶏を始めました。餌は有機生産物を中心に単品で購入して安全な自家配合をすること。薬剤や添加物は一切使用しないこと。野菜の残渣や雑草などの緑餌を与えること。ヒナから平飼い育成して半年かけて産卵させることに専念していました。そしてこの卵を求められるお客さんがお陰様で次第に増えてきました。そんな折、自

生農場がゴルフ場の建設予定地に入ってしまう、よい条件で農場の移築を求められました。その頃は、「一町一場」のゴルフブームで環境破壊が危惧されていました。私達は、保守的な土地柄故、もし反対を表明すれば娘達に何かの影響が及ぶのではないかと心配がありました。でも手塩にかけて建設した施設とこの環境からどうしても離れることが許されず何があってもこの地にとどまる決心をしました。それと強い信念を通せたのは、宮澤賢治の「正しく強く生きるとは 銀河系を自らの中に意識してそれに応じていくことである」という言葉でした。

約3,000名の反対署名、県内初の立木トラスト運動では各新聞に掲載され約1500本分の支援者が集まりました。平成4年「猿島野の大地を考える会」が誕生し、会の基本理念を宮澤賢治の世界観に則り「自由な魂、平等、行動」としました。その後、自生農場の鶏舎に、絶滅危惧種のオオタカが2度入り、部会「オオタカ保護の会」が発足し、調査、観察を続けるうちゴルフ場の予定地内に営巣を発見。私達の会は、反対を表明しても対決ではなく対話の姿勢で一貫してきたので、妻がゴルフ場の社長さんに何回か便りを送りこちらの真意を伝えた結果、誠実に対処してくれ、レイアウトを変更し、オオタカの保護区域を設けてくれました。丁度その頃、妻は会に呼びかけて「猿島野まるごと博物館」というエコミュージアムを作っている時だったので、その場所を「野鳥の森」として加えました。又、彼女はゴミ拾いを3年近くやっていた間に、拾ったゴミを持っていくリサイクルセンターのゴミの山の中から日本文化の香りのする諸々の物を持ち帰り、又ゴミ拾いの途上で出会った大量の木枠も手に入れ、全部くぎを抜き積み重ねてありました。私が鶏舎を1人で建てた建設力を見抜かれ、あてにされていたのです。



初夏の小野農場。羊子夫人画。日本文化と自然との調和の美を表現したくて。

そこで私は仕事の合間をぬって、その廃材と建て具を活用して3年かけて館を作り、古い日本文化の品々を収めたのが、猿島野まるごと博物館の拠点「私の宮澤賢治かん」です。

予定の2年遅れて開場したゴルフ場さんとの関係も良好で、私達の会も反対した

お陰で環境問題に目覚め、先ず手がけたのが炭作りでした。そして、根本的な解決策を求める過程で出会ったのが有用微生物でした。炭は微生物の住処になり、大地、水、大気全てを浄化してくれるのが有用微生物であることを、会では一つずつ検証し解明していきました。自生農場の鶏にもぼかしや飲用、散布で試したところ、それまで少しあった尻突つきがすっかりなくなり、以前から悪臭はありませんでしたが、それもすっかりなくなり、卵も更に上質になりました。

そして、これは余談かもしれませんが、宮澤賢治の「農民芸術概論綱要」の中に「誰もみな芸術家たる感受を為せ」という言葉があり、私達は2人とも以前から絵画に憧れがあったものの、私達には遠い世界で不可能と思っていたのが、この賢治の言葉で思い切って絵画クラブに入り、恥もかいて絵も描くことになりました。生活が豊かになった気がして感謝しています。「私の宮澤賢治かん」や会の事務所に自分達の拙い作品をかけて楽しんでます。

さて農場の抱える問題も少なくなった頃から国際貢献を実践したく WWOOF (Willing Workers On Organic Farms) に加入しました。この制度はイギリスで始まり、登録した有機農家と、そこでの作業希望者を取り持つ橋渡しの役割を担っています。短期・長期の田舎暮らし体験を国内・海外の有機農場で労働と引き換えに食事、宿泊場所を無償で提供し、大自然の中で働き生き方のヒントを見つけることが主な活動です。次女がこの制度を活用してニュージーランドで体験、帰国し、私達の農場でも早速申し込むと国内はもちろん海外からの申し込みも沢山あり、アジア、欧米、オーストラリア、スコットランドなどから来てくれました。これまで受け入れた若者は男女合わせて20数名にもなりました。鶏の飼育管理をしながら各国の生活事情がわかりとても貴重な国際交流ができました。その中に、次女の伴侶となる青年もいて、農場の広場で手作りのテーブル、竹のコップ、ウェディングケーキ等で自然の結婚式をあげました。

平成12年に会はNPO法人の資格を取得しました。そしてそれまでの活動を総括して、2つの事業に集約しました。一つは環境保全事業です。私達が居を構えた旧猿島町は、町長さんもゴミ拾いが好きで環境問題に関心があり、県で最初に「住民参加型」という冠をつけた環境基本計画を作りました。会では「住民参加型」に着目し、有用微生物のぼかしを活用した生ごみ処理法を提案し、町は1年半のモニター期間を経て感想を聞き、ぼかしの無料配布制度を実施。その結果、周辺の自治体の中で可燃ゴミの償却費が最低になり合併直前までその制度は続きました。もう一つ、住民参加で実現したのが、町が会に委託した「米のとぎ汁流さない制度」でした。町では、排水対策に困っており相談を受けた会では、有用微生物による排水浄化実験を官民協働でやり、会がそれ以前から毎月やっていた水質検査で驚異的な数値を得て、モニターさんに毎月有用微生物の活性液を渡し、環境を汚す米のとぎ汁を微生物の餌にした発酵液を作り、様々な生活改善に活用する制度ができました。又、実

験の際、排水を汚す2大犯人のもう一つが合成洗剤と気づき、会考案の安全な有用微生物入りの液体石鹼を製造。そして最後は、放射能軽減や地球温暖化防止に貢献してくれる光合成細菌という微生物による生ゴミの簡便な自家処理法にたどり着き、会として光合成細菌の培養も可能になりました。そしてこれら全てを普及していくことを総称して環境保全事業としました。

そしてもう一つは、『もったいない ピース・エコ・ショップ事業』です。このきっかけは、平成6年に農場を手伝っていた妻が、製品外の卵や上質の鶏糞や余剰野菜がもったいなく、又働き甲斐も欲しくて、これらの品を売ってその売上を、子供の命を象徴するユニセフに送ろうと思いついて「ユニセフ・エコ・ショップ」として誕生しました。途中で、世界平和を体現しているペシャワール会の中村哲医師の偉業に感動し支援の主軸をそこに移し、又有用微生物、その活性液、液体石鹼、光合成細菌、有機野菜などをエコと総称して『もったいない ピース・エコ・ショップ』に変更しました。最初は自生農場内で木の柵に看板を下げてやっていましたが、平成17年頃売上が低迷した時期があり、それまでも余剰有機野菜で心強い協力者であった奉



空想政治の世界観より
とりあえず症候群の
あなたに

小野
羊子

CDブック

羊子夫人著「とりあえず症候群のあなたに」。
とりあえず症候群の方達に、「とりあえず」では
ない生き方を、自作の歌を通してわかってもら
えたくてCD本に。

仕会の清水美智子さんから「ゴルフ場
さんでやらせてもらえば」という助言
があり、妻が思い切って頼んでみた
ところ快諾してくれ、それからはゴルフ
場さんの玄関先でやらせて頂き、売上
も上昇し、現在までありがたい共生関
係が続いています。これまでの支援総
額は、平成30年までで3,658万6千円
になりました。私達も世界平和という
大きなテーマに日々関与でき、元気、
安心、希望、連帯感という生きがい
を感じています。これも、様々な人の
ご理解とご協力の賜物で、感謝感謝
です。

このように私達の会がたどり着いた
2大事業『もったいない ピース・
エコ・ショップ事業』と『有用微生物
による環境保全事業』は、栗田先生
が奉仕会の学生に取り組むようと
残された言葉『国際協力と環境保
全』の具体的な誰でも取り組み易
い住民参加型で『とりあえず』
ではなく、根本的普遍的な一つ
の形ではないかと思っています。

そして更にもう一つ、妻がゴルフ場でやらせて頂いたお陰で大きな副産物がありました。彼女は、お店番をしながら読書や手紙書きなどをして時間を大事に使い、「時は命の燃焼なり」が口癖です。彼女はその時の読書で、1948年、終戦3年後に世界中が物不足で疲弊している時、イギリスにチャリティーショップが一店でき、現在では一万店以上世界中に広がっていると知り、「もったいない ピース エコ ショップ を広げる事業」を思い付きました。「念ずれば叶う」の言葉通り、これまでに5号店まで生まれました。この日本人の国民性である「もったいない」をノーベル平和賞を受賞したアフリカのマータイ女史が「もったいないを世界共通語に」と絶賛しました。「もったいないピース・エコショップ」が世界共通語になって「争いのない環境を汚さない社会」の実現に一役買ってくれることを願っています。

次に明るい話題をもう一つ書かせて頂きます。2年前若いお母さん会員さんが、この農場の自然の中で大地に根ざし、三つ子の魂を失わないような強い子を育てたいという要望があり、自然育児の会「大地っ子」が誕生したことです。月2回親子が集い、鶏とも触れ合いながら自然の中で自由に遊び、昼食をみんなで持ち寄った食材で作り、それは楽しく食べています。こちらも昔ながらの竈を作り薪で煮炊きをする事を基本に手助けをして一緒に楽しんでいます。妻のごみ拾いから平成6年に自然と生まれた部会「四季の会」の人達も、この大地っ子の活動を温かく見守り、いつの日か私達の活動が自然に次世代に受け継がれる事を願っています。

最後になりましたが、妻がゴルフ場から帰って、2人でお茶を飲んでいる至福の時間にいつも「お父さんの創った自生農場という土台がなければ、『もったいないピース・エコ・ショップ』は存在しなかったし、お父さんの建設力がなかったら宮澤賢治かんや諸々の施設はできなかった。」と言ってくれます。たしかに妻は農業の事には一切携わることなく育ったので結婚当時は戸惑うことばかりのようでしたが、何事にも興味を示して真剣に考え、立ち足る困難にもめげず、取り組んでよく働いてくれました。妻がなくてはこの農場の設立には到底たどり着けなかったと思います。二人三脚とはまさしくこの事だと実感しました。

そして、これまでにご指導くださった先生や先輩諸氏の方々には心からの感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。そして道半ばで他界された会員の方々にはとても残念でならなかったことと思います。この記念誌で追悼ができればとてもありがたいことと思います。みなさんのご冥福を心からお祈りいたします。

今日まで私を支え続けてくれた言葉があります。それは「感謝と祈り」でありまこれからも最期まで座右の銘として、与えられた一度しかない人生を全うしたいと思っています。